

P17

検査用グミゼリーを用いた新たな咀嚼能率の評価法の開発とその有効性の検討

○堀田舞佳、藤田優子、塩野康裕、杉山
絢子、牧憲司（九歯大・小児歯）

【目的】

咀嚼運動は顎口腔系機能の主要な部分を占め、顎骨の健全な発育や健常性維持に重要であるばかりでなく他の生体機能や精神活動の発達にも大きく関与している。咀嚼能力を評価にはこれまで多くの検査法が提唱されてきたが、多数の被験者を対象とした場合、より簡便で迅速な評価法が必要とされる。そこで今回我々は、特殊な操作や測定機器を要さず、視覚的に結果を評価できるグミゼリーを用いた新たな咀嚼能率検査法を開発し、本評価法の有効性について検討を行った。

【対象と方法】

健康な成人男女 28 名を対象とし、検査用グミゼリー（カムゾウくん[®]）を 1 分間自由咀嚼させた。咀嚼後、グミゼリーの①総粒子数計測、②最大粒子投影面積計測、③視覚資料によるスコア判定をそれぞれ 14 日間隔で 2 回行った。検者内信頼性と系統誤差の確認にはそれぞれ級内相関係数(ICC)と Bland-Altman 分析を使用した。①～③の結果は、ピアソンの相関係数と曲線回帰分析を用いて統計処理を行った。

【結果】

すべてのデータにおいて ICC (1, 2) は 0.9 以上で高い信頼性が得られ、Bland-Altman 分析で系統誤差は検出されなかった。総粒子数と最大粒子投影面積と最大粒子投影面積と視覚資料によるスコア判定との間にはそれぞれ負の相関関係が、総粒子数と視覚資料によるスコア判定の間には強い正の相関関係が認められた。

【考察】

本研究におけるグミゼリーを用いた咀嚼能率検査は十分な信頼性と再現性を有し、新たに作成した視覚資料によるスコア判定法も非常に有効であることが証明された。このスコアを使用した判定法は、従来の方法に比べ、簡便かつ迅速であることから、今後の臨床研究において有効に活用できる可能性があることが示唆された。

P18

小児歯科医院で行ったことばの教室の実態

○石倉行男 西崎智子 緒方克也
医療法人発達歯科会おがた小児歯科
医院（福岡市）

緒言

障害者歯科と小児歯科を専門とする当歯科医院で 1995 年より言語聴覚士によることばの教室を開始した。対象者は 1 年を超えて継続した指導を受けた者が多く、そこで 2013 年度 1 年間に言語聴覚療法を行った症例を分析することで、ことばに問題を持つ小児の実態を表すと考えたので報告する。

対象と方法

対象は 2013 年 4 月から 2014 年 3 月までに当院のことばの教室で言語聴覚療法を受けた者 35 名とした。調査の方法は実施した言語聴覚療法の記録と診療録より年齢、障害名、主訴などを転記し、調査項目に沿って後方視的に分析した。なお、調査に当たっては個人が特定できないための配慮を行った。

結果

対象者 35 名に行った指導日数は述べ 628 日であった。年齢は 3 歳から 14 歳で、平均は約 9 歳であった。障害別にはダウン症候群が 13 名、自閉スペクトラム症が 12 名、精神遅滞児 4 名、その他の障害児 3 名、定型発達児 3 名であった。主訴は全体を通して「ことばが遅い」が最も多く、次いで「発音が不明瞭で聞き取れない」「文章になっていない」などであった。

結論

当院では 20 年間にわたり言語聴覚士による歯科医療活動として開業歯科医院でのリハビリテーションを行ってきた。言語聴覚士は医師、歯科医師の指示のもとに言語機能等の訓練業務を行うことができるとされており、地域の歯科医院はその場所として有意義であると思われる。今後は指導の効果を高めるための工夫が必要と思われる。